

---

# 楽しい楽しい学校生活。

羅針

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽しい楽しい学校生活。

### 【Nコード】

N3829Z

### 【作者名】

羅針

### 【あらすじ】

超能力が科学的に肯定された世界で超能力を使って学生時代をすごすバカ共のお話。

## プロローグ

「楽しいことないかなあ」

この地球、いや、日本はこの10年でとんでもなく進歩した。

まず、2050年に理科学者がこのような実験の結果を発表した  
一部要約 「なんら変わらない空気を発火させることが出来る。」

このような発表をした。

この発明は、俗に言う《超能力》を科学的に肯定することとなる。  
それから大量の発明がなされる。

最初が発火、発電、凍結、動力 ありとあらゆる超能力を発明され  
た。

それからこれを兵力として扱うようにしたのがアメリカ。

それが2054年に行われた。

圧倒的な支配力を持って地球全土を支配し尽くしたアメリカ、  
それによって政治の中心はアメリカ、

学業の中心は日本、

商業の中心は中国、

産業はヨーロッパ・その他

となってしまうた。でもなったらなつたで戦争はなくなり結構豊  
かになったりする

言語統一、貨幣統一、生活区統一、その他。

すべてが同じところに同じ事をすればこれ以上楽なことは、ない

そして攻める地域がなくなったアメリカは宇宙へと眼を向けた

今は新しい生き物の居る星を探索中だそうですわ ええ

そして超能力の使える学生を増やす学業の大都市日本ではまたこい  
つを中心に大事件を起こそうとしていた

## 龍馬

日本には<sup>レベル</sup>技量というので階級設定してある。

最大<sup>レベル</sup>技量は、5。最低は-1。

俺は前回の<sup>レベル</sup>技量テストで<sup>レベル</sup>技量5 次で0を取ってしまった。

何があつたんだ？

そう テストをサボつたのだ。テストなんて受ける価値ない、やーい

「ふーん ふーん」

学校もサボつてブラブラ、学校の下校時間だなあ……

「おいよ龍馬、またサボつたのか？」

俺は魏崎龍馬。漢字めんどいつつーの。

16歳になつても書類にはひらがなだ。

言語は英語に統一したら使える人が不平等だという事で、新しい言語の開発までした

小説上では日本語で表示します

「あつたりめーだ。」

こいつは大利合祀、レベル1の超能力者。

レベル1は最低のレベル。これだけは最低でも取っておかないと。

レベル2は学校卒業レベル

レベル3は兵士レベル

レベル4は教師、教授レベル

レベル5は俗に言う最強のレベル。このラインをとればレベル5ですよ、というのはいない。

レベル0は俺のようにテストを受けてなかったりとんでもなく才能が無かつたりしたら0だ。

レベル-1は犯罪者、能力によって廃人にされた、いわば障害者だ。

俺の親は、母さんが、4。父さんも、4。別に先生をしているわけではないが、4なのだ。

俺は親を超えてしまったのだがまた0になった。

「授業受けないと落ちるぞ。」

「落ちるとここまで落ちたさ」

「なんか、カツコいい」

「意味わかんねーよ。」

「ノってやったんだよ」

「そうかよ」

ピリリと腕に巻きつけた時計のような機械が鳴り出した。一番右の機械だ。

「仕事か？」

「仕事だ。」

## 仕事

「はいはい トラブル解決の龍馬様登場ですよー  
一回5000synですよー」

synとは支配後のお金の単位、大体1syn=1円って感じだ  
「こつちだこつち」

「御用は？」

「そのビルが倒壊して、人が埋もれてんだ 助けてくれ」

「了解です」

ふむふむ、レベル0には無理だな

別にレベル5の超能力は使えるけどレベル相応の超能力つかわねー  
と政府から、

「レベルに合わないスキルを行使したため 罰則」

とかいう通達が来るんだよなあ。

了解つたしここは、罰則覚悟だなあ。

「物質移動」

ゴア つと鉄組みを思いっきり取っ払うと3人ほど埋もれていた

「ありがとうございます」

「これだけですか？」

「あと1人です」

つたく ダリイなあ

金ももらえるからいいんだけど。

ここは

「テレキネシス  
物質移動」

ゴア つと鉄組みを思いっきり取っ払うと、そこには誰も居なかつた。

つたく どこ隠れてやがる

「セフィロト  
生命の樹 検索」

ポワアと光る樹を作り出して、一気に成長させる。

この樹は生命のある方向に進むから、……いた。

「ぐう 助けて」

「はいはい その為にきたんですからね」

セフィロト  
生命の樹を消滅させてつと

それより状況確認。

上半身はこつちがわに見えているけど、下半身は見えない。

すると向こう側は圧迫されて動かせないからここから動かないのか。  
上から取っ払うか？ いや、それじゃあなんかあったときに無事じやあすまない。

前回の3人は鉄骨に囲まれてるだけだったけど……

「だああ もう！ 発火 ハイロキネシス

少し暑いかもしれませんが、気をつけてください。」

超熱量で上の鉄骨を溶かす溶かす

助ける人にかかる重みを減らした

鉄が溶けて流れる、

助ける人に触れて、

テレポルト  
「移動」

ふっ つとその場から消え、依頼者の下に届けた、

4人目のひとは案の定、膝から下が取れていた。

あの鉄骨の山から脛の部分だけを見つけて持ってきた俺ってすごい？

## 政府

昨日は見てもならないものを拾ってしまった。

思わず吐いたぜえ クソ。

朝、時計を見る。 < 1 : 5 6 >。

一応空は白んでいる。 昼の2時？ どんだけだよ。

ポリポリと頭を掻く。 お菓子を蓄えているところから、ポチを（薄塩）一袋入手

s c を起動。

s c とは p c に変わる次世代コンピュータだ。

略はスペシャルコンピュータとか

ハイスペックコンピュータ。

普通には「スペコン」と呼んでいる。

正確に言うと、p c ≡ s c だ。 p c と s c に変わりはない。

だが p c で A というサイトにアクセスしたときと s c で A というサイトにアクセスしたときとは

いろいろと特典がつくんだけ。

おかげで p c の3倍並の s c を購入したんだが……特典がダサい。

ま、p c とのアクセス速度が数倍から数百倍だ。相当早い。

起動してインターネットを起動。 y o u t u b e を開く。

最近では、最先端のロボットの動画がアップされている。見ていて面白い。

すると腕に巻きつけた右の機械が鳴り出した。

「政府だ。この度、トラブル解決程度を雇うほど人材に困ってはいないのだが、少々トラブルがあつてね、君に任務を頼みたいんだ

が。

「5000 s y n で承ります。」

「それでは、君の家の s c に画像を送る。その場所に保管されている、



<輝石の連玉>を収集してもらいたい。」

そして、その<輝石の連玉>を手に入れたらどこにいけば終了なのかや

報酬の受け渡しをした

「了解」

電話を切ると1秒しないうちに、地図が送られてきた。

なんでこんな科学時代に輝石なんかを収集しなくちゃいけないんだ？

「はあ」

遂にそろそろ《魔法》とかを信じる世界になっちまうのかな？

この輝石は少し、政府に渡してはいけない予感がするぜ……

## 輝石の連玉

「いよつと」

俺は行けと言われた、失われた大陸、<ムー大陸>に到着した。

10年前までは、この大陸は発見されなかったのだが、

超能力を発見した3日後に海上に新しい大陸が発見されたのだ。

どう見ても関連性がある。

そして、学業都市の首相、前は、戸村首相。今は弦儒<sup>げんじゆ</sup>首相。

新しくなつてから、超能力の開発などが盛んになったり、こういう

輝石を発見させられたり。

どうも裏があるように見える。戦争でも起こすつもりか？

「おい、貴様。ここで何をしている。」

「んげつ!？」

「<輝石の連玉>を盗りにきた輩<sup>やから</sup>か。

フン まとめてぶつ殺してやるよ」

「なぜに!？」

「この島の輝石は俺が頂く」

……この島の？

他にもいろいろあるのか？

「パイロキネシス えんじゆつじ」

「発火! 炎十字!!」

ズアアと炎の十字架が俺を襲つ

「固有No.003。固有能力、ライスト・ドア時空のドア」

俺の目の前に木製のドアが現れる。それを開けると敵の炎が吸い込まれ

俺の背後にあるドアから出て行つた。

「ちつ! 固有能力者か

固有No.001。固有能力、ポイント・ピッキング座標設定」

ポイント・ピッキング座標設定か テレポートだりい能力者だ

「逃げる! 移動!」

ふっ っと島の裏側に俺は逃げた  
目の前には洞窟。入るしかないかあ  
ザッザッ っと勇んで進んでいく

## 洞窟の中にて

洞窟の中はゴツゴツした岩肌がむき出しになっていた。

ここをおくに進んでも、何もないうような気もするけどなあ。

誰かが通った痕跡もなく、ただ、岩肌を進んでいくだけである

<輝石の連玉>って何だろう？

7つ集めると願い事が叶います的な？

いや、複数もあるのだろうか？「連」って所から複数あってもよさ

そうだが……

「……………行き止まりか……………」

ライスト・ドア  
時空のドアで元居た場所に戻る

レポート  
移動して、逃げてきたところだ。

さあてどうしようかな？

目の前には、サルのような奇怪な生物が敵意むき出しでこっちを睨  
んでいる。

原生生物かな？

バイロキネシス  
「発火！」

一気に骨にすると、俺は別のルートを探し始めた

島を一周して、洞窟、洞穴、すべてを回ったが、何もなかった。

政府も見つからなかったから、俺みたいな奴をよこしたのか。

いや、何でここに<輝石の連玉>があるって分かったんだ？

例の奇怪サルにも何度も出会ったが、振り返ちだ。

「居た！ ぶつ殺す！」

本日3度目の再会。感動的だね！

えんじゅうじ  
「炎十字」

「フン」

さっ っと避けると地面に落ちている大き目の石を拾った。

ガコン！ ……ガコン？

ガキヤっ　と地面がパツクリと割れ、俺は落ちていった。

洞窟の中にて（後書き）

作：「ふう〜 やつと書き終えたよお ゴフツ！？」

龍：「おいおいよ、テメーなに俺の風貌無視しちゃっててくれてんの？」

作：「ああ すまないってえええ ガハツ！？」

龍：「ここでいいからさっさとこの風貌説明しろ」

作：「ウイース」

龍馬の風貌

眼は黒、髪は濃い緑。眼はつり眼で少し不良のオーラが漂う感じ。根は優しいやつだが（トラブルバスターやってるくらいだし）

口調に難あり。

背は176cm行くか行かないくらい

龍：「ま、こんなところか」

作：「致死量並みの血液、殴られて出ちゃったけど……」

龍：「そーか おめでとう！ それならトドメもさそつか」

作：「やめれー！ ゴフ……」

龍：「それでは次回もよろしく〜」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3829z/>

---

楽しい楽しい学校生活。

2011年12月17日23時53分発行